

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2020No.160】(HP 掲載)

分類：CD

作曲家：ベートーヴェン:他

曲：弦楽四重奏曲 第11番 へ短調 作品95「セリオーン」他

演奏：シュトイデ弦楽四重奏団

発売：カメラータ

No.：CMCD-28335

概要：

ウィーンフィルのコンサートマスターであるフォルクハルト・シュトイデが加わった PAC チェンバーオーケストラのコンサート で求めてきた CD です。



収録曲目：

L.ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第11番 へ短調 作品95「セリオーン」

F.シューベルト:弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 D.810「死と乙女」

演奏：

シュトイデ弦楽四重奏団

フォルクハルト・シュトイデ(第1 ヴァイオリン)

ホルガー・グロー(第2 ヴァイオリン)

エルマー・ランデラー(ヴィオラ)

ヴォルフガング・ヘルテル(チェロ)

録音時期：2014年11月/東京(ライブ録音)

ネット上から得られた解説は以下のとおりです。

「2002年にウィーン・フィルのコンサートマスター、シュトイデを中心に同団メンバーで結成されたシュトイデ弦楽四重奏団。2010年録音のチャイコフスキー&ボロディンに続く本作では、いよいよウィーン古典派のベートーヴェンとシューベルトを収録しました。その演奏にはウィーン伝統の色褪せることなく脈々と息づき、伝統の力を現代に生き生きとした形で示しています。近年の演奏の潮流とは一線を画した、王道を行く説得力ある演奏をお聴きください。

シュトイデ弦楽四重奏団

2002年にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーで結成されたシュトイデ弦楽四重奏団は、ウィーン・フィルという名門オーケストラから誕生した弦楽四重奏団の伝統を受け継ぐ弦楽四重奏団である。古典派から現代作品までにおよぶ60曲以上のオペラ作品と数多くの交響曲作品をレパートリーとするオーケストラ・メンバーとしての活動、さらに室内楽奏者としての活動は多忙を極めるが、素晴らしい相互作用を生み出している。シュトイデ弦楽四重奏団のレパートリーは、古典派からロマン派、さらに20世紀の作品や現代作品初演も積極的に行っている。また、様々な演奏家たちとの新たな出会いと共演を重ねることにより、幅の広いファン層から支持され、オーストリア国内にとどまらず、海外でも活発な演奏活動を行っている。

●フォルクハルト・シュトイデ(第1ヴァイオリン)1971年生まれ。1994年よりウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターを務める。ウィーン・フィルのメンバーにより結成されたウィーン・ヴィルトゥオーゼンのリーダーを2001年より務める。

●ホルガー・グロー(第2ヴァイオリン)1976年ヴァイツ(オーストリア)生まれ。2000年にグラーツ交響楽団第1コンサートマスターに就任。2006年ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に入団。2009年よりウィーン・ヴィルトゥオーゼンのメンバーとしても活躍している。

●エルマー・ランデラー(ヴィオラ)1974年生まれ。1996年にウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のヴィオラ奏者に就任。ベルヴェデーレ三重奏団、ウィーン・ヴィルトゥオーゼンのメンバーでもある。

●ヴォルフガング・ヘルテル(チェロ)1975年生まれ。2000年にウィーン・フィルおよびウィーン国立歌劇場管弦楽団のチェロ奏者に就任。2000年まで、ウィーン・フォルクスオーパーの首席チェロ奏者を務めた。カメラータ・トウキョウ」

メンバー全員がウィーン・フィルのメンバーであるために、ライブの録音環境は必ずしも最上ではないものの、ウィーン・フィルの音色を感じ取ることができます。

セリオソは、過度に緊張感を与えず、抑制の効いた演奏です。

死と乙女は、緊張とやすらぎが交互に現れますが、ウィーン・フィルのメンバーの典雅なアンサンブルがそれを支えます。その音色は第2楽章において最もよく現われています。

以上